

学校教育評価 令和4年度 1 学期アンケート結果、及び 昨年度7月との比較

アンケート実施：令和4年7月（数字は%）

調査人数：全校人（低学年 119/129 人・高学年 121/133 人）

保護者アンケート児童数配布 回答数 110 人（家庭数戸 189）

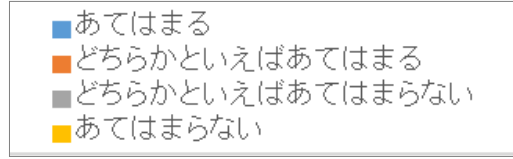
教職員 19 人

評価：A（あてはまる）

B（どちらかといえばあてはまる）

C（どちらかといえばあてはまらない）

D（あてはまらない）



【開かれた学校づくり】

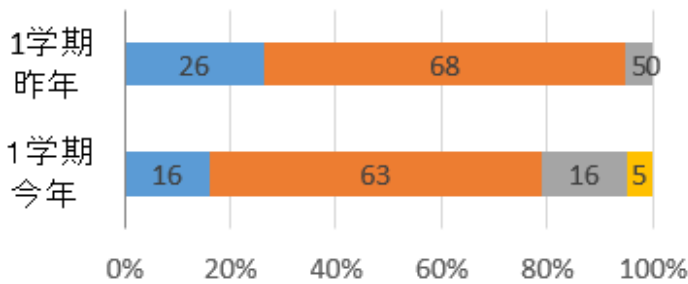
・学校生活や学習状況等について、積極的に情報発信し、教育活動の可視化を図る。

教職員（問1）学校からの家庭や地域への情報発信はよくできている。

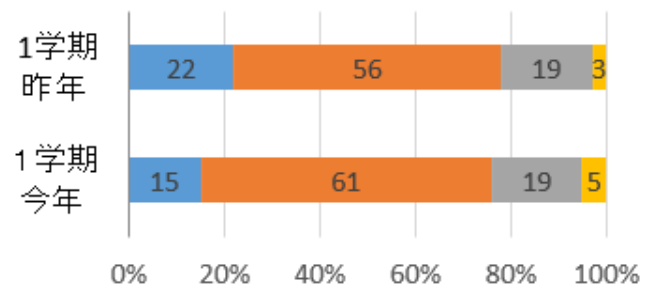
保護者（問1）ホームページやメールなどにより、学校の様子がよくわかる。

			A	B	C	D		達成 状況
教職員	A：A+Bが90%以上 C：上記以外	B：A+Bが70%以上	問1 16	63	16	5	B	B
保護者	A：A+Bが90%以上 C：上記以外	B：A+Bが70%以上	問1 15	61	19	5	B	

教職員（評価）情報発信・可視化



保護者（評価）情報発信・可視化



【記述欄】

●学校のホームページや、紙ベースでもよいので、子供達の普段の様子が知りたいです。（写真付き学級通信など）

【分析・今後の対応】

昨年度と比較すると、教職員の評価として「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」が多くなっている。HPでは、児童の活動の様子が分かるような画像の使用、コメントなどで情報を積極的に発信していく。特に、その月の特別行事や取り組みについてはHPを活用して活動の様子を伝える。また、子どもたちの普段の様子や学習の様子については、毎月予定している学校へ行こう DAY や参観日等で、生の子どもたちの姿を見て知っていただきたい。

【生活指導】

- ・家庭、地域、学校どこでも自分から進んで挨拶できる子どもを育てる。
- ・感染について正しく理解し、感染予防に努める子どもを育てる。

〈自律について〉

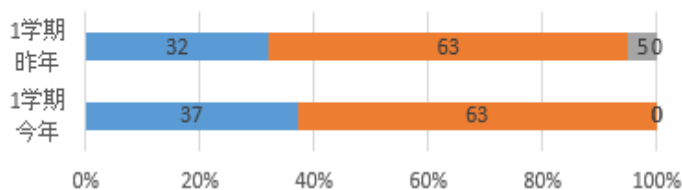
教職員 (問2) 児童が判断したり、決めたりする機会を増やしている。

保護者 (問2) 家庭で自分からやろうとすることが増えてきた。

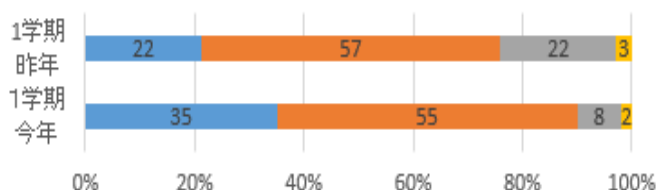
児童 (問1) 自分で考えて行動している。

			A	B	C	D		達成状況
教職員	A : A+Bが90%以上 C : 上記以外	B : A+Bが60%以上	問2 37	63	0	0	A	A
保護者	A : A+Bが90%以上 C : 上記以外	B : A+Bが60%以上	問2 35	55	8	2	A	
児童	A : A+Bが90%以上 C : 上記以外	B : A+Bが60%以上	問1 50	43	5	2	A	

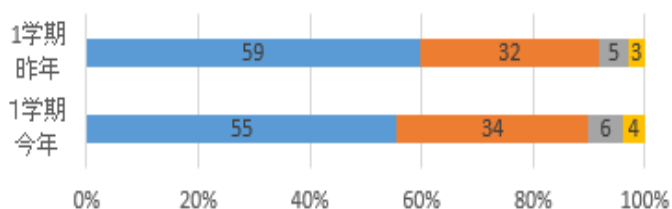
教職員(評価)選択・判断の機会の充実



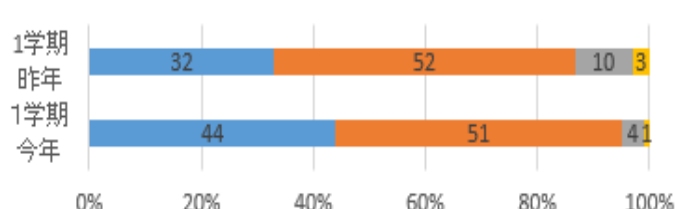
保護者(評価)自分からやろうとすることが増えた



低学年(評価)自分で考えて行動



高学年(評価)自分で考えて行動



【分析・今後の対応】

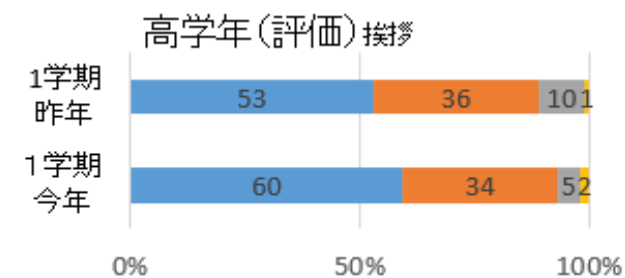
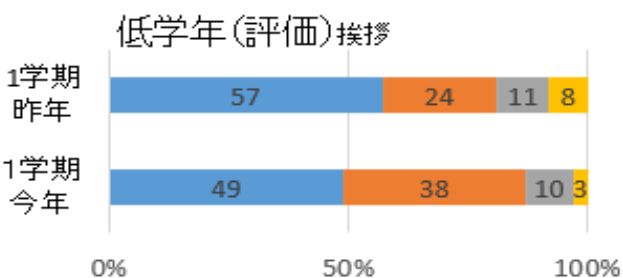
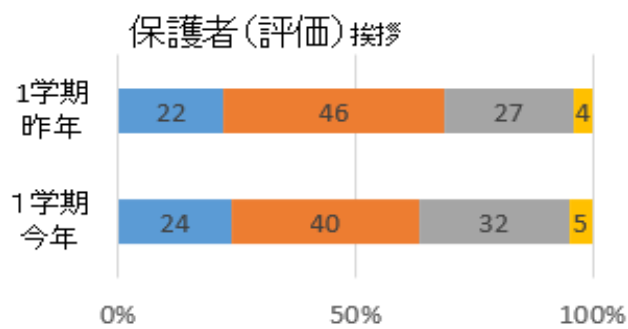
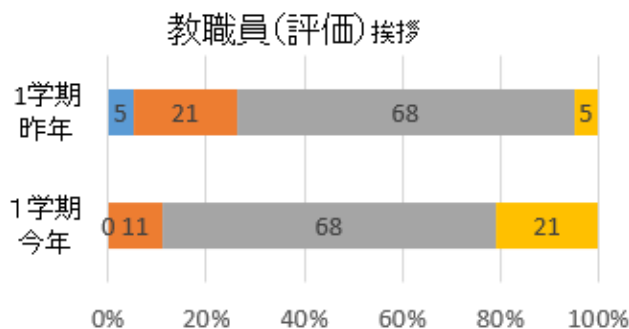
自律について「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」の割合はどのグループの回答を見ても高い数値となっている。特に教職員、保護者、高学年においては、昨年度より10%近く上がっている。このことから自分で考えて行動しようとする児童が増えてきていると思われる。

これは、学校で児童の自律心を高めるために、自己選択や自己決定をする機会を積極的に取り入れようとしている指導が一定の効果を上げていると考えられる。保護者の結果からも、児童が家庭や地域において自分で考えて行動する姿が増えてきているという実態が見られる。しかし、低学年において若干ではあるが昨年度より数値が下がっている。引き続き、児童が自発的に考え、行動する機会や場を設ける。そして、児童に肯定的な声かけをすることで、自分たちの成長を感じさせると共に、家庭とも連携しながら、児童が自律に向かう指導を進めていく必要がある。

〈挨拶について〉

- 教職員** (問3) 子どもたちは、学校で挨拶をしている。
- 保護者** (問3) お子さんは、家でも、学校でも、地域でも、よく挨拶をしている。
- 児童** (問2) 家でも学校でも地域でも、自分から進んであいさつをしている。

			A	B	C	D		達成状況	
教職員	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	B : A+B が 60%以上	問3	0	11	68	21	C	B
保護者	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	B : A+B が 60%以上	問3	24	40	32	5	B	
児童	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	B : A+B が 60%以上	問2	55	36	7	2	A	



【記述欄】

- 長男が入学してから10年くらい、朝の交通当番をしています。年々挨拶のできない子が増えています。次男も小声で挨拶するので、高学年がお手本を見せるように話すのですが、なかなか難しいです。大きな声で挨拶できたら気持ちがいいことを分かって欲しいです。以前は、挨拶委員会のようなものがあり、委員の子が下駄箱あたりに立って挨拶運動をしていましたが、今はPTAがされてるだけで、子どもたちが自分たちで挨拶しよう！！と頑張っ欲しいです。
- 立ち当番をしていて思いますが、挨拶をしても挨拶をする子がとても少ないです。
- 仲良しの友達間では出来ている。

【分析・今後の対応】

挨拶について「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」の割合は、教師と保護者において昨年度より下がっている。しかし、児童自身の自己評価は上がっており、ずれが見られる。児童は挨拶をしていると思っているが、教師の21%は子供たちは挨拶をしていないと感じている。コロナ禍が続き、声を出すような指導や機会が減っていることや、教師と児童でめざす姿が共有できていないことが考えられる。今後どういう姿になってほしいのか、どういう姿が望ましいのか、「自分から」「目をつないで」「いつでも」をキーワードにあいさつをする目的などを児童に伝えていく指導を進めていく。また、児童会や委員会と連携し、学校全体で挨拶が活性化する取り組みを考えていきたい。さらに、PTAの挨拶運動と連携し、挨拶についての啓発を行っていきたい。

【学習指導】

- ・聴き合い、対話し、学び合う学びを通して、「わかった」「できた」と一人ひとりが実感し、学び続けようとする意欲を育てる。
- ・協働的な学びを通して、一人ひとりのよさや個性を認め合い、共に学び合う集団づくりに努める。

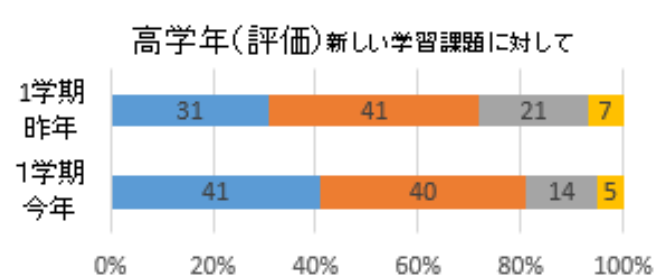
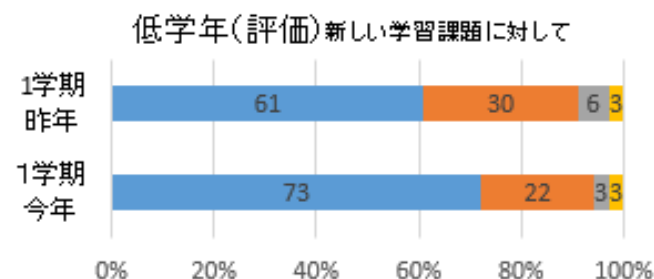
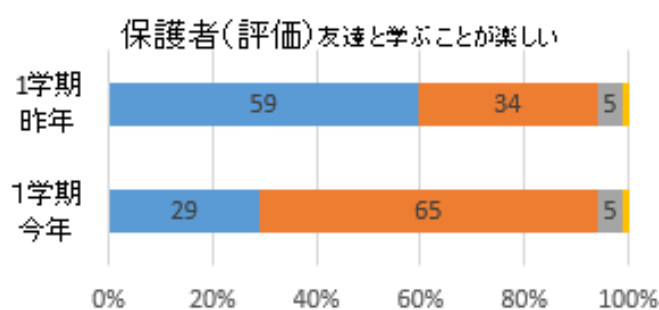
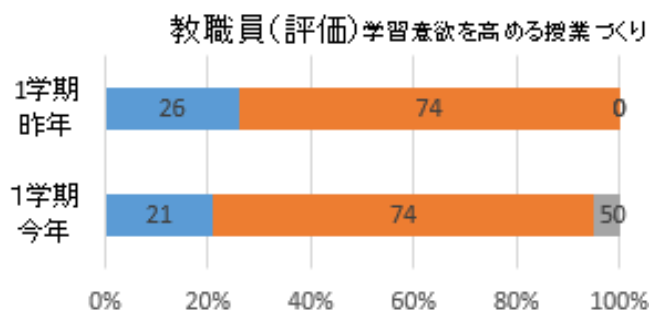
〈学ぶ意欲について〉

教職員 (項目4) 学習意欲を高める授業づくりに努めている。

保護者 (項目4) お子さんは、友だちと学ぶことを楽しんでいる。

児童 (項目3) 新しい課題、学習に取り組む時は楽しみだ。

			A	B	C	D		達成状況
教職員	A : A+Bが90%以上 C : 上記以外	B : A+Bが70%以上	問4 21	74	5	0	A	A
保護者	A : A+Bが90%以上 C : 上記以外	B : A+Bが70%以上	問4 29	65	5	1	A	
児童	A : A+Bが90%以上 C : 上記以外	B : A+Bが70%以上	問3 57	31	8	4	A	



【分析・今後の対応】

〈学ぶ意欲〉について、A・B評価を肯定的評価とした場合、教職員95%、保護者94%、児童88%であり、昨年度と比較すると、教職員-5%、保護者+1%、低学年+3%、高学年+9%となっている。全体的に肯定的評価が9割を占めており、昨年度まで増加傾向が見られた高学年児童のC・D評価も減少していることから、良好な結果といえる。

一方で、A評価は教職員-5%、保護者-30%と大きく減少しているなど、児童の認識とズレが見られる。減少幅が大きい保護者については、今年度は参観の機会が昨年度に比べて増えたことに加え、年度当初の学習規律重視の授業や廊下からの参加による聞きづらさなども影響していると考えられる。教職員と児童の項目は〈学習に取り組む意欲〉であるのに対して、保護者の項目は〈友達と学ぶ意欲〉であることから、3回の参観では友達と意欲的に協働する場面が十分に感じられにくかったかもしれない。

今後の対応としては、単元や導入時における学習課題の工夫や、ペア・グループ活動といった学習形態の多様化はもちろん、「楽しい」「面白い」といった情意的な意欲から、各学年の指導事項を達成できる質的な意欲を向上できるよう、児童の実態に応じた手立てを考えていきたい。

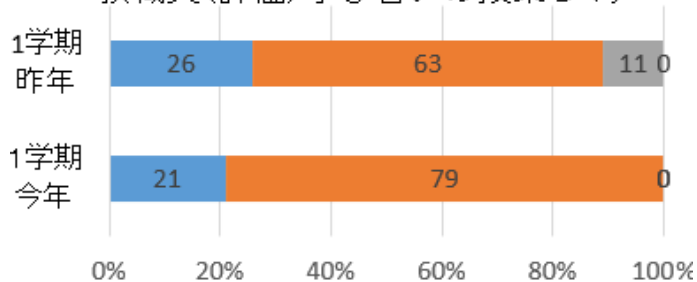
〈分かった・できたの実感について〉

教職員 (項目5) 友だちの意見を聞いたり、考えを広げたりと、学び合いの授業づくりをしている。

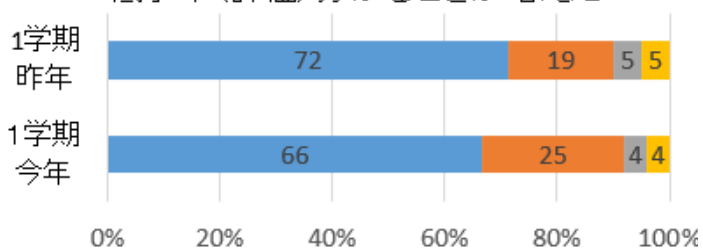
児童 (項目4) 勉強をしていて、少しでも分かることやできることがふえてきた。

			A	B	C	D		達成状況
教職員	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	B : A+B が 70%以上	問5 21	79	0	0	A	A
児童	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	B : A+B が 70%以上	問4 71	22	4	3	A	

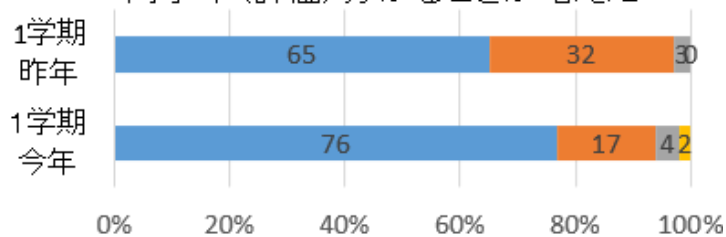
教職員(評価) 学び合いの授業づくり



低学年(評価) 分かることが増えた



高学年(評価) 分かることが増えた



【分析・今後の対応】

〈分かった・できたの実感〉について、A・B 評価を合わせた肯定的評価は教職員 100%、低学年 91%、高学年 93% であり、昨年度と比較すると、教職員 +11%、低学年 +2%、高学年 -3% となっている。高学年のみ減少しているが、A 評価は教職員 -5%、低学年 -6% と減少しているのに対して、高学年は +11% と増加している。学習内容が高度化する高学年で A 評価が増加していることは良好な結果といえる一方で、C・D 評価が低学年 8%、高学年 6% と一定数存在している。

今後の対応として、これまでの学び合い型の授業をより充実させることに加えて、タブレットを活用した新たな学び合いの形式を取り入れる必要がある。また、「分かった・できた」という実感をより確かにするために、1時間や単元において課題解決の場(練習問題・ショートテスト・単元末テスト・パフォーマンス課題など)を設け、個に応じたスモールステップを踏む指導や、自身の学ぶ姿や学習の達成状況を振り返らせる指導を充実させていく。さらに、授業と家庭学習との連動についても、全校で系統的に高めていきたい。

【人権教育】

- ・学校・家庭生活における指導を通して、互いに人権を尊重し合い、自尊感情を育むように努める。
- ・児童への心のケアを通して、感染症の影響によるいじめ・差別・偏見等の啓発に努める。

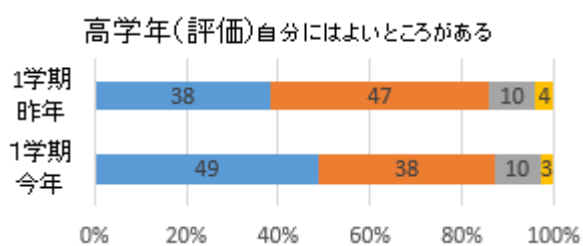
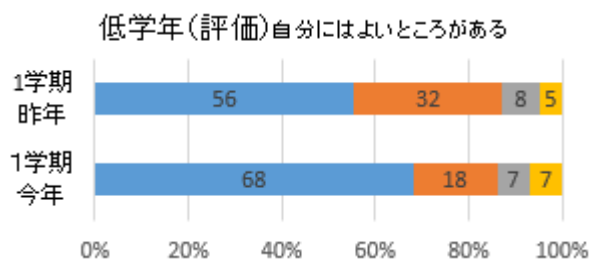
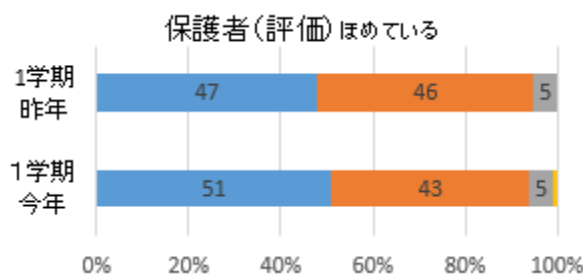
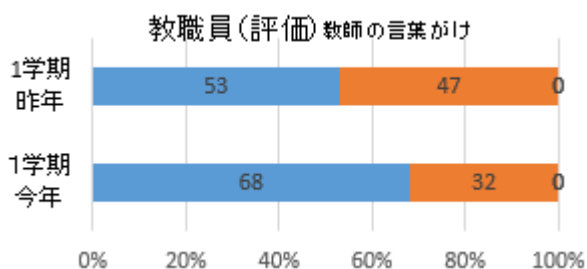
〈自尊感情について〉

教職員 (項目6) 子どもの伸びを認める言葉かけの質の向上に努めている。

保護者 (項目5) お子さんのがんばりやよいところをほめている。

児童 (項目5) 自分にはよいところがある。

			A	B	C	D		達成状況	
教職員	A: A+Bが90%以上 C: 上記以外	B: A+Bが70%以上	問6	68	32	0	0	A	A
保護者	A: A+Bが90%以上 C: 上記以外	B: A+Bが70%以上	問5	51	43	5	1	A	
児童	A: A+Bが90%以上 C: 上記以外	B: A+Bが70%以上	問5	59	28	8	5	B	



【記述欄】

- 毎日ありがとうございます。先生からの励ましの言葉でやる気が出るようになりました。

【分析・今後の対応】

学校や家庭で「ほめて伸ばす」関わり方を行うことで、昨年より、Bの「どちらかと言えばあてはまる」より、Aの「あてはまる」と感じている児童が増えている。子どもの伸びを認める言葉かけにより、自尊感情や自己肯定感を得られるような関わり方に努めることが大切である。

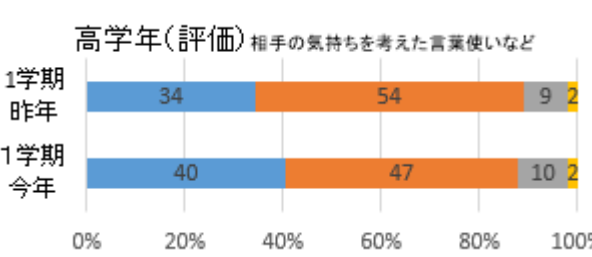
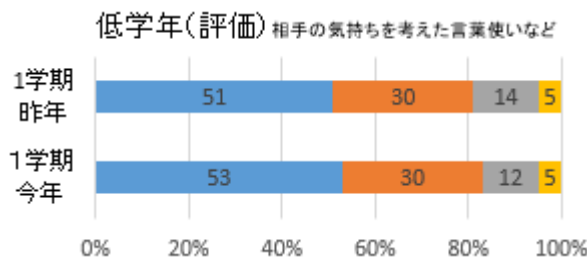
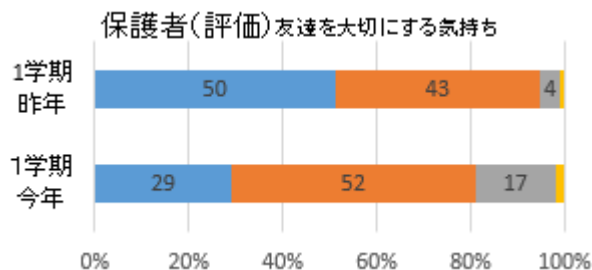
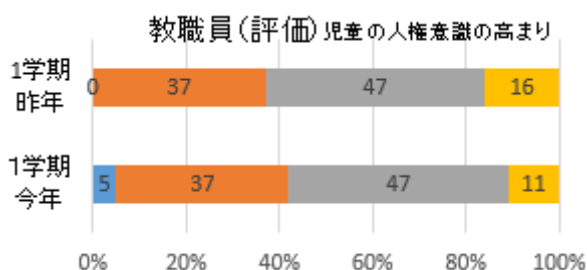
一方、「あてはまらない・どちらかと言えばあてはまらない」と評価した児童が1割以上いる。何かができるときにほめたり認めたりするだけでなく、児童の内面に寄り添い、居場所作りなど安心できる場や時間が必要である。学校では複数の教職員が関わり、高学年では複数年複数担任制によって、多くの教職員と関わっている。今後も教職員が児童理解に努めて連携を図り、複数の教職員で関わることで多面的に認めていく。家庭ではスキンシップや子どもの話を聴く時間を作ってもらえるよう働きかける。

2学期は学校行事などで活躍の場が増える。一人一人を認め、伸ばすための声掛けをしながら、児童の様子を積極的に家庭に伝え、その頑張りを家庭でもほめてもらい、さらに自尊感情が高まることを期待している。

〈人権意識について〉

- 教職員** (項目7) 児童の人権感覚や人権意識が育ってきている。
- 保護者** (項目6) お子さんは、友だちを大切にすることが育ってきている。
- 児童** (項目6) 相手の気持ちを考えた行動、声かけ、言葉づかいができています。

			A	B	C	D		達成状況
教職員	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	問 7	5	37	47	11	C	B
保護者	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	問 6	29	52	17	2	B	
児童	A : A+B が 90%以上 C : 上記以外	問 6	47	38	11	4	B	



【記述欄】

- 反抗期の子どもと口論になった際、もう1人の子が紙に書く言葉は消しゴムで消せるけど、言葉の消しゴムはないんだよと教えてくれました。ハッとさせられました。いつも相手を思いやろうとしてくれる心根の優しい子に育てられたことに感謝です。
- いじめについて。学区懇談会で校長先生が迅速に解決できているという発言がありました。本当に、いじめと理解されているなら、いじめが迅速に解決できる問題ではないことくらい教員であればわかるはずではないか?と思いました。それを解決できていると断言すること自体、解決する気すら無いことを物語っていると思います。上っ面だけのごめんなさいの言い合いや、簡素な喧嘩両成敗の考え方はやめて、もっと時間をかけて一人一人に向き合い根本に近づく努力をして欲しいと思います。いじめを無くす事はできないと思いますが、自殺を避ける手は沢山ある。それに向き合わず、簡単に解決したと思いついで根深い問題から目を逸らすことが、大切な命を犠牲にするし、親の信頼を失う発言だと自覚するべきです。

【分析・今後の対応】

児童は、年齢が上がるにつれて、自分自身の言動について客観的にふりかえることができるようになってきている。今後、ふりかえたことを自分自身のよい言動につなげていけるような手だてを考えていく必要がある。

教職員は、児童の気になる言動に対してのアプローチをしていくことはもちろんであるが、温かい言動や周囲からの関わりにも目を向け、認めていくことで子どもたちの温かい関わりが広がっていくような支援を行っていく。それをもとにして、人権感覚の向上につなげていきたい。

いじめについては、早期発見、早期対応を第一に考えているが、早期解決に至らないケースもあり、すべての事案に対して3ヶ月以上の経過観察期間を設け、子どもの人間関係の状況把握に努めている。このことが保護者にうまく伝わらなかった事を反省するとともに、いじめの解決は家庭との連携が重要であり、今後も協力して対応する姿勢を持ち続けたい。

【複数学年複数担任制】

【記述欄】

- 学区懇談会では、その場しのぎの良いところしかアピールがなかった。もっと問題のある点を公開し、親たちと一緒に解決しようとして欲しい。核になることを隠し、わざわざ暑い中沢山の親を集めて意味のない学校内容を説明しただけ。上っ面の薄っぺらい意味のない時間でした。担任を無くした5.6年生。でもはじめは4.5.6年でしたよね？それを5.6年減らした理由は何なのか？うまくいってるように言われてましたが、本当は失敗なのでは？実際、目が行き届かないことから、子供と真剣に向き合う事ができていないのでは？担任制に戻して欲しい。
- 複数担任には不満があります。

【分析・今後の対応】

複数学年複数担任制については、昨年度の4年生の85.7%が「多くの先生とかかわれてよい」と感じるなど肯定的な回答をしていたが、子どもの発達段階とともに、高学年チームの人数が多くなることで情報共有に時間がかかるなどの点で見直しを図り、5、6年生に絞った。実施3年目で対象学年の変更に及んだことは申し訳ないが、実施してうまくいかなかったところは変更を加え、より良い教育支援体制を創り上げていきたい。

複数での支援になる分、一人の先生が関われる時間は限られるが、複数で関われること、複数の目で見守る体制になることで、一人の先生の価値観に左右されず、多面的な理解ができるようになり、指導のアイデアも多く出し合っているなど、メリットも多くある。ご意見のあった「真剣に子どもと向き合う姿勢」は、従来同様、持ち続けていると考えており、取り組みにご理解いただきたい。

【その他】

【記述欄】

- いつもお世話になり、ありがとうございます。十分やっただいていると感謝しています。
- 反抗期真っ只中で、家族に対してはなかなか優しい言葉はかけてはくれませんが、外では頑張っているようです。甘えるところ、きちんとしなければいけないところを考えて行動していて、いい意味で社会性が育っているのかなと思っています。外では精一杯誰かのために頑張る分、家では自分の気持ちに素直で居たいということかと受け止めつつ、本人の気持ちとルールとを擦り合わせながら、より善い環境とは何かを日々模索しているところです。